

# 自己と他者をつなぐ新聞活用

指定校 1 年次 長野県長野西高等学校全日制 山条 康弘  
半田 淳子  
山野井 亮秀

## (1) 本校の新聞活用 (NIE) の現状

本校は各学年に普通科 6 クラス、国際教養科 1 クラスがあり、全校生徒数 845 名 (H27. 4. 1 現在) を抱えている。H26 年度卒業生の 98% が進学を希望しており、95% の生徒がセンター試験に出願をしている高校である (数字は本年度の学校要覧をもとに算出)。学校重点目標にもある“進路目標を実現するための学力向上”に向け、学校全体として以下の取組み (NIE に関連すること) を行ってきた。

○新聞記事紹介…学校長と教頭、各学年の副担任が順番で、生徒に読んでほしい記事を 1 ケ月に 1 回程度のペースで A4・1 枚程度にまとめ、各担任が HR の時間に配布し、感想などを書き込んでいる。

○現代社会 (1 年次履修) の課題…ゴールデンウィークと夏休みの年 2 回、自分が興味・関心を持った新聞記事を配布したプリントに貼り、自分の感想を書いて提出する。

上記にある“生徒に読んでほしい記事”というのは『広く世間の実情を知ってもらいたい』という事の他に、『進路目標の実現を進めていく上で必要な面接や小論文にも対応できる力を養ってほしい』という目的がある。この取り組みは 10 年来、本校で行われてきた取り組みである。

しかし、SHR でしっかりと記事を読み込むにはあまりにも時間が短く、生徒会委員の改選や修学旅行などの行事が重なると LHR でも時間が足りなくなり、結局は配って終わってしまう残念な現状もしばしばあった。

## (2) 実践のねらい

上記の現状を踏まえ、また NIE 研究指定校の決定を頂き、以下のねらいを定めた。

- ① 1 つの事象を多角的にとらえられる力を意識させる。
- ② 自分と他者の意見を比較し、さらに深く考察できる力を育成する。
- ③ 主権者として幅広い視野で社会全体をみることができる機会の 1 つとする。

これらの力が必要となるのは本校だけでなく、広く一般の高校生全体に求められるものと考ええる。特に公職選挙法の改正に伴い、2016 年の夏に予定されている参議院選挙では文字通り主権者としての判断力が求められており、同時に新しい主権者教育の在り方も求められている。これらの力を育成するためには、まず報道されている内容に積極的に興味をもち、それらについて理解することが大前提である。その興味・関心を喚起する方法の具体化が、本校の本年度の取組みと関わってくると考えた。

### (3) 研究の概要

今年度の取組みは以下にあるA～Dである。提供して頂いた新聞は、5～8月が朝日新聞と毎日新聞、8～11月が読売新聞・日経新聞・信濃毎日新聞、12～3月が産経新聞・中日新聞であり、いずれも印刷室に常備し切り取りなどの加工は自由とした。ただし、印刷室は通常生徒が出入りしないので、実際には職員間で利用するのみとなった。生徒が利用できるようにするための工夫は、来年への課題となっている。また、学校で購入しているAsahi Weeklyや長野市民新聞もあり、新聞紙の種類としてはバラエティーに富んだものとなった。さらに、管理職の先生や事務の方をお願いをして信毎データベースも利用できるようにして頂いた。キーワードや日付により記事を検索することができ、NIEを進めていく上で、これは大変便利なものであると感じた。実際に研究授業を組み立てる上で、おおいに利用した。

- A. 新聞記事紹介 前述の(1)の通り
- B. 現代社会の課題 前述の(1)の通り
- C. 回し読み新聞の作成 (1学年)

本校では、例年1学年を対象としてキャリア教育の一環として、進路研修会を秋に設けている。今年度は以下の日程で取組み、その中の1つとしてNIEを扱う時間を設けて、回し読み新聞を作成した。なお、山野井先生は前任の岡谷東高校で同様の取組みを行った経験があり、半田先生と共に積極的に関わって頂いた。

- 9/30 (水)
  - ①講演会 9:30～11:30 (120分)  
講演者 上田情報ビジネス専門学校 比田井和孝 先生
  - ②来年度科目選択について (60分)
  - ③学習会 (60分)
  - ④本校職員によるプレゼンテーションの仕方 (約30分) 1月に各班ごとに発表
- 10/1 (木)
  - ①午前 小論文講演会
  - ②午後 NIE学習 半田淳子先生・山野井亮秀先生 (約90分)
- 10/2 (金) コース別研修会
  - Aコース 富士重工業株式会社→群馬大学 (社会情報・教育・医学)  
大塚製薬高崎工場
  - Bコース 株式会社カインズ→高崎経済大学 (経済・地域政策)
  - Cコース LIXIL (小矢部工場) →富山大学 (人文・経済・理学・工学)
  - Dコース 国際石油開発帝石株式会社→長岡技術科学大学 (機械創造工学等)
  - Eコース JCV上越ケーブルビジョン→長岡造形大学 (プロダクトデザイン等)
  - Fコース 養命酒・伊那食品→信州大学 (農学部)

1学年の生徒には事前にプリントを配布し、新聞記事を用意させた。その際に生徒向けに配布したプリントは以下の通り。〔以下の○印部分は原文のまま〕

○10月1日にむけて、自分の心が動いた記事、他の人に紹介したい記事であること。

○記事の種類は2つ、1つは自分の進路に関わるもので、自分が参加する研修するコースに関わるものでもよいし、若者・大学・働く人・労働・就職など漠然としたなかでも可。

もう1つは思わず笑ってしまった記事や感動した記事、この本を紹介したい等、自分が興味をもった記事を用意する。この本を紹介したいなど！

○4人1組のグループをつくり、回し読み新聞をつくること。〔原文引用終わり〕

当日は1学年生徒全員が椅子と机を体育館に持ち込み、午前は全員で講演会を聞き、午後はNIEの授業を行った。当日くじを引き、グループと座席を確定、授業の初めに自己紹介を行い、記事を持ち寄った理由などを話しながら新聞をどのように構成するか考えてもらった。また、記事の他に新聞を一人一紙持ってきて、紙面構成の参考にしたり、必要な部分を切り取って飾り付けるといった工夫も行った。話したこともない生徒といきなり作業を行うのであるが、そこをやってしまう所が本校生の素晴らしいところだと考えられる。



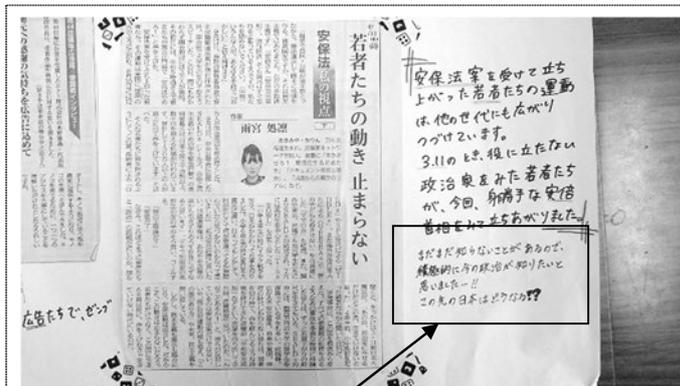
←職員が見本として作製したもの。昼休みのうちに体育館内に掲示しあらかじめ生徒におおよそのイメージを持ってもらった。



↑新聞をつくっている様子。台紙となる模造紙は学校側で用意したが、ペンなどは各自で持ち寄ってもらった。一旦方向性が決まると、作業自体はスムーズであった。



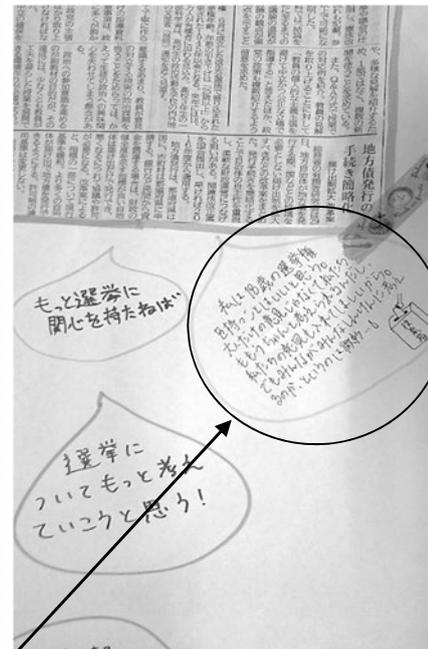
↑回し読み新聞作成の説明を、パワーポイントを使用して行った。



《安保法制の記事》

以下がこの部分の生徒のコメント [原文のまま]

まだまだ知らないことがあるので、積極的に今の政治を知りたいと思いました！  
この先の日本はどうなる！？



《公職選挙法改正の記事》

以下がこの部分の生徒のコメント [原文のまま]

私は18歳の選挙権を持つことはいいことと思う。大人だけの意見じゃなくて私たちも、もうちゃんと考えられるんだし、私たちの意見も入れてほしいから。でも、みんながみんな真剣に考えるのかは微妙…。

D. 公開授業

日時：10月27日 火曜日 4時間目 (13:15~14:20)

講座：2年生 文系 選択講座 授業者：山条康弘

1 単元名 経済・文化的交流と世界史 ～南沙諸島領有問題について～

2 単元の目標

4月以降、世界史の授業の中で1つの文明が他の文明と経済・文化的交流を行ってきたことを紹介してきた。それを振り返りながら、アジア全域は古来より東アジアと西アジアやアフリカ、さらにはヨーロッパまでをつなぐ陸路・海路として要衝の地であった。その一端である南沙諸島は、近年海底資源などをめぐり多くの国がその領有を主張し国際的な領土問題にまで発展している。現在の南沙諸島問題の概要を理解し、日本にとってこの問題は対岸の火事ではなく、日本のエネルギー・経済問題に直結するものである事を理解させ、さらに将来の主権者である生徒が日本の歩むべき道を考える機会としたい。

3 単元の概要

①古来より、多くの人々が交流してきた地であることを復習。海路に限定せず、陸路においても様々な交流がおこなわれ、授業で扱ったローマ帝国・エジプト王朝・ササン朝ペルシア [新聞記事有]・古代インド王朝・東南アジア諸王朝・中国王朝 (漢～唐)・朝鮮王朝・日本にいたる時代・地域をパワーポイントなどで確認する。2000年以上前より人は政治・経済・文化の交流を求め、価値観の異なる地域へと分け入ってきた事を復習し確認する。

②近年、南沙諸島の海底資源をめぐり周辺諸国が対立をしている。また、かつてシルクロード・

海の道と呼ばれた広大な地域においても、中国が経済圏を拡大させる『シルクロード構想』を打ち出している。その中に日本へ送られる石油の輸送ルート（シーレーン）の1つがあり、それは南沙諸島付近を通る。石油に限った事ではないが、多くの物資が輸送されるシーレーンにおいて紛争が発生すれば、日本のみならず世界に与える影響を考える。エネルギー問題については、川内原子力発電所を除く全ての原子力発電所が停止しているなか、発電力としては原油や天然ガスなどを利用した火力発電が中心となっていること等、若干の説明が必要と思われる。原子力発電所稼働の是非についてまで広げてしまうと時間が足りなくなるので、この時間では簡単な説明にとどめたい。

- ③歴史的に多くの文化が行き来してきており、同時に多くの紛争が行われてきていることを踏まえ、日本人としてこの領土問題をどうとらえればよいかを考えさせ、自分の意見を記入させる。※また生徒は意見・感想を記入するが、それだけで終わらせず、そのプリントを周囲の生徒と交換し、別の生徒がコメントを書くようにして、他者の意見にも耳を傾けるようにしたい。

※実践のねらい①～③にある力を育成させる方法として、上記の下線部の様な取り組みを行った。以下の図1にあるように、1枚のプリントに対し、2名の生徒がコメントを書き込めるようにした。

破線の部分は授業を進める中で、スクリーンを見ながら、あるいは配布された新聞記事を読みながら生徒が書き込める内容となっている。

太線より下の部分は、自分の感想を書き込むようになっている。

生徒は感想を書いた後、自分のプリントを周囲の生徒と交換し、書いてある意見に対するコメントを、A・Bの欄にお互いに書き込んでいく。公開授業では約20分の時間を設けたが、ほぼ全ての生徒がプリントを交換しコメントを書くことができた。

図1

厳密に言えば他者と意見の交換をただけであるが、“自分とは違う誰かが同じ事象をどうとらえているかを知ることができた” という意味では多角的にとらえることの助けになっていると考えられるし、主権者として幅広い視野で社会を見ることにつながったとも捉えられる。他者の意見と自分のそれを比較し、どうやったら深く考察できるかについては次年度以降の課題でもあり、主権者教育における高いハードルであるとも考える。

#### 4 本時の展開

	学習活動	指導内容	備考
導入 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パワーポイントの利用</li> <li>・プリントの配布 (新聞記事2枚)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでの授業の中でシルクロードや海の道について学んだ内容を、パワーポイントや配布した新聞記事によって確認させる。</li> </ul>	
展開 (35分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新聞記事の中から中国政府が進めている「一带一路」構想の記事を見つけ、プリントに簡潔にまとめる。</li> <li>・南沙諸島に関する記事を探して、領有問題が発生している事を確認する。</li> <li>・南沙諸島の領有を主張している国を、パワーポイントを見ながら確認しプリントに記入する。また、南沙諸島を中国が領有する歴史的経緯についても、プリントの穴埋めを行いながら確認する。</li> <li>・日本のエネルギー問題と南沙諸島の領有問題が密接な関係にある事を理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新聞記事を読み、プリントに「一带一路」構想について簡潔にまとめさせる。</li> <li>・新聞記事を読ませることにより、南沙諸島の領有問題やその地理的な位置を認識させる。</li> <li>・南沙諸島の領有を主張している国を確認させる。また、南沙諸島から距離のある中国政府がなぜ主張しているのか、南沙諸島を多くの国が領有する理由を簡潔に説明し理解させる。</li> <li>・パワーポイントを利用し、日本の原油・天然ガス輸入相手国が西アジアに集中している事、さらにオイルタンカーが南沙諸島地域を通過することを理解させ、日本のエネルギー問題と南沙諸島の領有問題が深く関係している事を理解させる。</li> </ul>	
まとめ (20分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本のエネルギー問題をふまえ、南沙諸島の領有問題について、日本がどうあるべきか自分の感想を記入する。</li> <li>・記入した後、周囲の生徒とプリントを交換し、コメントを記入してもらう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・南沙諸島に関する記事をスクリーンや新聞紙を印刷した物で確認する。</li> <li>・自分の意見を記入するだけでなく、他者にコメントを書いてもらうことにより、様々な視点がある事を理解させる。</li> </ul>	

#### (4) 研究のまとめと残された課題

(2) 実践のねらいにある①～③を育成するために、上記の3つの取り組みを行ってきた。

本校の生徒は総じて真面目で素直な生徒が多いため、ペーパーを配られれば真剣に取り組む。しかし一方で他者の意見を取り込み、さらに掘り下げて考えていく段階までには至っていないと感じる。“新聞記事紹介”をさらに実のある取り組みにしていくには、現状のSHRで配布して『時間を見つけて読んでおくように』ではなく、ある程度の時間(15分程度)を確保する工夫が必要と考える。そうすると10分しかないSHRではなく、50分あるLHRの中での取り組みが考えられる。生徒会行事や進路選択に関わる学年集会などが盛りだくさんにある現状では、LHRの年間計画に組み込んでもらい、その年間計画に合わせて発行日を設定するといった工夫が必要である。

“回し読み新聞”の取り組みは、新聞に接する機会も増え、自分の考えと他者の考えを比べる絶好の機会でもあるため来年度も継続したいと考えている。新聞記事を使ったグループワークが発展していけば、①～③の育成にもつながると考えられる。しかし、新聞記事を紹介するタイミング、グループワークを行うタイミングについては校内でバランスをとる必要があると思われる。今年度の取り組みにある公開授業後に行われた意見交換会で、本校の職員から以下の意見があった。『ある授業で新聞記事を使いグループワークを行おうとしたところ、何名かの生徒から「この時間でもやるの～」との言葉が漏れてきた。』これには担当者として苦笑せざるを得なかった。しかしこの言葉は、新聞記事のある授業が風景化してはならないという至極当然であり、重要な意味を持っている。授業のための授業にしてはならないと同様で、適切な時期とタイミングを逸してしまえば、どんなに素晴らしいアイディアに満ちた授業であっても生徒の心に届かない。

来年度は指定校2年目を迎える。学校全体として、少なくとも私が担当する地歴・公民科の中では意見交換を充分にして、(2)実践のねらいにある①～③を育成できるような取り組みをめざしていきたい。